

漢字と英単語を比較する

— pupil と swallow について —

河野庸二

序言

今回取り上げる漢字と英単語の語源上の比較を初めて本格的に行ったのは、おそらく在野の語源研究者山中襄太氏であったろう。山中氏の著作は大修館書店と校倉書房から何冊か出ているが、さすがに長年語源研究一筋に打ち込んでこられただけあって、その語源説には説得力があり、傾聴すべきものが少なくない。同氏の説はもっと注目されてよいと考える。同氏がかつて究極的には語源不明とされる英単語 dog の語源を漢字〈獨〉の語源と関係づける大胆な仮説を展開されたことがある。¹⁾

ところで、山中氏でなくとも英語と漢語に関心のある者なら誰しも、英単語 pupil (瞳孔) と漢字〈瞳〉、さらには2つの英単語, swallow¹ (ツバメ), swallow² (呑み込む) と漢字〈燕〉・〈嚙〉の奇妙なまでの符合に気付いたことがあるのではないか。とすれば両者の語源についてさらに詳しく比較検討したくなるのは自然のなりゆきである。さいわいわが国には漢字の起源研究の分野に関しては、藤堂明保、加藤常賢両博士の遺された立派な業績がある。それらに照らし合わせて問題の英単語と漢字を再検討してみると、意外な事実と新たな問題点や疑問点が浮かび上がってくるのである。英語・漢語間にまたがる、語源学上のアイロニーとも呼ぶべきこの奇妙な偶然を取り上げて論ずるのが本稿の目的である。なお、pupil (瞳孔) と漢字〈瞳〉については、小川鼎三氏の『医学用語の起り』に「瞳孔」の章があり、両者の関係が詳細にわたり論じられているが、要は pupil と「瞳」とが軌を一にすることを説いたものであり、本稿の説かんとする内容とは異なっている。²⁾

pupil (瞳孔) と〈瞳〉

藤堂明保博士の『漢字語源辞典』(pp. 287-288)には漢字〈童〉さらにはそれに関連して〈瞳〉の語源に関して詳しく解説した一節がある。

金文では、童の字が重の字に代用されている。字形C童の金文は、章の字の上部を含んでいる。イレズミのようなものをつける刺針で、目をつき通してメクラにした奴隷を童という（章の字の上部は、刺針の形である。章^あとは、刺針で刺した入れずみの意である）。童の字には東を音符として含んでいる。つき通すようにトンと突く動作を撞^つといい、また衝突の衝の字でも書き表わす。

ヒトミは孔があいてつき抜けているから、瞳孔ドウコウといい、また「目童子」ともいう。一定の仕事をさせるだけなら奴隷の逃亡を防ぐためにメクラにした方がよい。後世になってもメクラ同様の無知な者を「童蒙」というのは、なお、原義を保存した用例である。童はドレイより、小者→わらべの意となり、ついに「メクラ奴隷」という原義を失ってしまった。³⁾（波線筆者）

また、藤堂説の要約ともいえる『学研漢和大辞典』の説明のうち、それぞれに関連する箇所は次のようになっている。

【童】[意味] ①《名》もと、刃物で目を突きぬいてめくらにした男のどれい。また、男の罪人をどれいとしたりしたもの。のち、雑用をする男の召使。男のしもべ。

【解字】東トウ（心棒をつきぬいた袋、太陽がつきぬけて出る方角）はつきぬく意を含む。童の下部の「東+土」は重や動の左側の部分と同じで、土（地面）をつきぬくように、↓型に動作や重みがかかること。童は「辛（鋭い刃物）+目+音符東+土」の会意兼形声文字で、刃物で目をついてめくらにした男のこと、棟トウ（つきぬくむねの木）-通トウ・ツウ（つ きぬく）などと同系のことば。⁴⁾（波線筆者）

【瞳】[意味] 《名》ひとみ 目の玉の中の黒い穴の部分。「^{どうこう}瞳孔」

【解字】「目+音符童トウ（穴をとおす）の会意兼形声文字。眼球をつきぬける穴。⁴⁾（波線筆者）」

一方加藤常賢博士の名著『漢字の起源』の説明はかなり専門的すなわち漢学者的であるが、同書（p. 735）の〈童〉の項の説明文は次のようになっている。（なお〈瞳〉の方は2次的に出来た字であるから同書には取り上げていない。）

字形 説文では篆文に従って「辛に従ひ（意符）重の省声（声符）」の形声字と言っている。この形がまた金文にも見えている。が別に金文には「目」字が付加されている。これがあると「辛」あるいは「𠂔」（セツ）字の存する意味がいっそう明瞭になる。「目」は単に目と見てもよし、また頭と見てもよい。ともかく顔面に辛で印を付けられたのであるから、「辛」と「目」とに従っている。

字音 「徒紅切」（トウ）である。「重」がこの音を表わす。この音の表わす意味は「奴」であろう。いったい「奴」字は契文以来あり、説文には「奴婢はみな古の辜人なり」とある。

字義 罪人の奴婢である。今は一般に「童幼」の意に使われているが、その本字は「僮」である。「僮」は「未だ冠せざるもの」あるいは「幼なり」と説かれているを見れば明白である。⁵⁾（波線筆者）

両書の説くところは完全に一致するわけではないが、総合すれば<童>の原義は「盲目にされた、あるいは顔に入れ墨をされた罪人の奴隷」だったことになる。さらに藤堂説によれば<童>の字には東（同氏は「心棒を抜き通した袋の象形文字」と説く）を音符として含んでおり、この字はつき通すようにトンと突く動作を表す<撞>・<衝>とも関係があるという。要するに、<瞳>は「目の、孔があいてつき抜けている部分」を表す会意兼形声文字ということになる。

一方 pupil²（瞳孔）の方は pupil¹（童子）に由来することが明らかのものである。標準的な語源辞書である *The Oxford Dictionary of English Etymology* の記載するところは次のとおりである。

pupil¹ orphan who is a minor and hence a ward XIV — (Wycl. Bible); one under instruction XVI. — (O)F. *pupille* m. and fem. or its source, L. *pupillus*, -illa orphan, ward, secondary dim. (on *pupulus*, -ula) of *pupus* boy, *pupa* girl.⁶⁾

pupil² circular opening in the iris of the eye. XVI. — (O)F. *pupille* or L. *pupilla* (cf. Sp. *pupila*, It. *pupilla*), secondary dim. of *pupa* girl, doll, pupil of the eye (see prec.). The application of the L. words to the pupil of the eye is based on or parallel to, that of Gr. *korē* maiden, girl, doll, pupil (the allusion being to the tiny images of persons or things that may be seen

therein).⁶⁾

要するに、ギリシア語においてもラテン語においても、「幼童」を表す語は瞳孔に小さな人の姿が映るところから「瞳孔」自体をも意味したのである。日本語の「ひとみ」「まなこ」(語源的にはそれぞれ「人見」「目の子」に違いない)、さらには漢語の「瞳子」「瞳人」という熟語もあるので、当然漢字<瞳>のなりたちも、これと同じ発想によるものと誰しも速断したくなるであろうが、語源に関する限り速断は禁物である。上に引用した中国語学者の説に従えば、真実は必ずしもそうではないことが分かる。大きな偶然が作用して外見上の相似を作り出しているかもしれないのである。

swallow¹, swallow²と漢字<燕>, <嗑>

pupil² (瞳孔) が pupil¹ (童子) からの意味の派生に過ぎないのに対して、swallow¹ (ツバメ) と swallow² (のみこむ) の場合は全く別系統の語が期せずして同じ語形になったのである。

swallow¹ bird of the genus *Hirundo*. OE. *swelwe* = OS. *swala*, OHG. *swal(a)wa* (Du. *zwaluw*, G. *schwalbe*), ON. *svala*:CGerm. (exc. Gothic)**swalwon*; other Germ. types (1) lack *w* in the final syll., (2) have an *m*-suffix, (3) have a dim. *k*-suffix; Russ. *solovej*, Czech *slavik* nightingale are assumed to be cognate.⁶⁾

swallow² take into the stomach through the mouth and gullet; transf. and fig. OE. *swelgan*, pt. *swelth*, *swulgon*, pp. *swolgen* = OS. *far|swelgan*, OHG. *swel(a)han*, *swalh*, *giswolgan* (Du. *swelgen*, G. *schwelgen*), ON. *svelga*, *svalg*, *sulgu*, *solginn*, : -CGerm. str. vb. (not in Goth.). f.**swelg-***swalg-***swulg-*, repr. also by OE. *geswelhg* gulf, abyss, OHG. *swelgo* glutton, ON. *svelgr* whirlpool, devourer, *sylgr* draught. Weak forms of pt. and pp. appeared XIV. The encroachment of the *o* of the pp. and the *a* of the pt. upon the present was from XII and XIII respectively.⁶⁾

語源辞典によって swallow¹ (n.) と swallow² (v.) の語源をどってみると、両者の成り立ちがまったく異なっていることが分かる。クラインの語源辞典によ

れば、ツバメの方の swallow は鳥の名を表す印欧祖語の *swol-wi- または *swal-wi- に由来し、⁷⁾ 動詞の方の swallow は古代語にあった動詞語尾が消失して現在の形になったものである。ところで、今一つ紛らわしいのは、漢語にも<燕>・<嚥>という一対の語が存在することである。そしてこれらの語は皮肉なことには発音ばかりではなく、意味の上でも swallow¹ (n.), swallow² (v.) と完全に対応しているのである。ところが、詳しく調べてみると、漢字<燕>・<嚥>の場合も、両者の間にはさほど深い関係がないことが分かる。<燕>・<嚥>については藤堂博士の『漢字語源辞典』も、加藤博士の『漢字の起源』も取り上げていないので再び『学研漢和大辞典』から引用することにする。

【燕】[解字] つばめを描いた象形文字で、その下部は二つに分かれた尾の形であり、火ではない。⁴⁾

【嚥】[解字] 「口+音符燕エン」の形声文字。燕は音符でつばめという意味とは関係がない。咽の異体字。⁴⁾

【咽】[解字] 因は、人が口印の敷物の上に寝て上から下へと押さえる姿。咽は「口+音符因」の会意兼形声文字で、上から下へぐっと押さえてのみ下すこと。印（上から下へ押す）と同系のことば。▽呑ドンは、ずっしりした物をかまずにのみ下す。飲は、液体をのむ。⁴⁾（波線筆者）

つまり、「のみこむ」の本字は<咽>イン・エンであり、<嚥>は音が通うために用いられる異体字に過ぎないというわけである。swallow¹ と swallow² が、互いに何ら関係なく、まったく別個に同じ語形になったのと同様に、漢字<嚥>は<燕>とは全然関係なく成立したことになる。しかし果たしてそうと言い切ってもいいのだろうか。いずれにしても swallow といい、<燕>・<嚥>といい、それぞれ思わせぶりたっぴりの語であることは指摘できそうである。「ツバメの素早い動作」あるいは「ツバメが大きな口をあげてエサをのみこむ動作」と、「人が物を一気にのみこむときの一瞬の呼吸」には通い合うものがあるような気がしてならないのである。そうでなければ、字画の少ない本字<咽>があるのに、わざわざ字画の多い異体字<嚥>を多用するわけがないと思われるのである。

結語

数ある英単語と漢字を丹念に比較検討していけば、まだまだ興味深い符合が見つかるかもしれない。なお、今回取り上げた例では、符合の偶然性を強調して論じてはいるものの、真実はまさしく「神のみぞ知る」なのである。

注

- 1) 山中襄太, 『語源十二支物語』 (pp. 160-161), 大修館書店, 昭和49年
- 2) 小川鼎三, 『医学用語の起り』 (pp. 77-80), 東京書籍, 昭和58年
- 3) 藤堂明保, 『漢字語源辞典』, 学燈社, 昭和55年
- 4) 藤堂明保, 『学研漢和大辞典』 学習研究社, 昭和62年
- 5) 加藤常賢, 『漢字の起源』, 角川書店, 昭和49年
- 6) *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford University Press, 1974
- 7) Ernest Klein, *Klein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, Elsevier, 1971

Comparing English Words
with Chinese Characters
— on *pupil* and *swallow* —

Yoji Kawano

It is a well-known story that the pupil of the eye is so called from the little images which appear in it. Strangely enough, the corresponding Chinese character is also the combination of an “eye” sign and a “little boy” sign, which suggests the coincidence in the making of the words. But a closer study reveals an almost unbelievable fact. There seems to be no connection between the “little boy” sign in the Chinese character and the image seen in the opening in the iris of the eye, because the sign in question originally meant a “slave who was made blind by piercing through the eyes.” Thus, the character signifies “the pierced part i.e. opening (in the iris) of the eye.”

On the other hand, *to swallow* derives from a totally different source from *swallow* (bird name). The Chinese character equivalent to it, however, combines the signs of a “mouth” and a “swallow” (bird). Dr. Akiyasu Todo, an authority on Chinese character origins, declares that there is no correlation between the two Chinese characters (*swallow* and *to swallow*), saying that the swallow sign in the verb in question is used only as a phonetic sign.

The present thesis aims at pointing out a few instances of irony in etymology between English and Chinese words.